

「1 m 3 w 5 d 幅、一・二センチ。長さ…一・五センチ……」

瞳を輝かせながら、クリトリスの育児日記をつける男がいる。私の彼氏である。

「包皮は少々癒着気味だったので、ベビー綿棒で清浄——つと」

ジュラルミン製のペンが、すらすらと几帳面な文字を綴っていくのを、たなか田中那美は指を咥えて見ていた。比喻ではない。親指の第一関節の半ば、爪の根元くらいまでを、私は自分の唇で挟んでいる。

ひずみいつき日隅一輝は、私が指しゃぶりをしていると、機嫌がよくなる。そのくせ、「発語に影響が出るからよくないよ」と嗜めてくるから、意味が分からない。私は成人女性で、彼とも普通に会話をしているのに。

やるべきか、やらざるべきか。指を口元に運ぶたびに逡巡する。でも、クリトリスに柔らかなメジャーを当てられ、計測される屈辱に耐えるためには、何かを嚙んでいないとやっていられない。私の親指の先には、今日も薄く歯形が残っている。

「絶頂回数は——何回だっけ？」

ふかふかのベッドに身を預けたまま、首を振る。五回までは数えていたけれど、その先は記憶が飛んでしまった。一輝くんは眉間に皺を寄せ、美しい顔を歪ませる。

「もう、ダメじゃないか。ちゃんと覚えてくれなきゃ、正確な成長記録が残せないよ」
「ごめんなさい」

「なんで謝るの？ ああ、そうか……ママの教え方が悪いから数えられないんだよね？」

那美ちゃんのクリトリスが成長曲線からちょっとずれはじめているのも、ママの愛情が足りないからだよね？　ごめんね？　ママのせいなんだよね？」

一輝くんがイライラしながら体を揺ると、肩を覆うピンクのフリルも揺れる。ひらひら。ゆらゆら。金魚のヒレみたいだ。

いかにも「新米ママ」といった雰囲気のエプロンは、色も縫製も安っぽい。一輝くんの容姿にも、高級感あふれる部屋にも、全然似合わないそれを、彼はなぜ選んだのだろう。デートで連れて行ってくれたガストロノミーや、記念日にくれた誕生石のネックレスは、普通にセンスがよかったのに。

「俺、結構頑張ってるよね？　仕事から帰ってきて疲れてるけど、那美ちゃんのパパも、ちゃんとできてるよね？」

ママになってくれと頼んだ覚えはないけれど、同調して頷く。

「このマンションもさあ——那美ちゃんのために用意したんだよ？」

マンションを買ってくれとも頼んだ覚えはない。でも頷く。

「色々大変だったんだから。資金の話じゃないよ？ 赤ちゃんは、お金の心配とかする必要ないからね。」

頷く。頷く。黙って頷く。

「現金一括購入だからローンとかもないし。最短日数で手続きを進めるために色々ツテ

を使っただのと、家具の手配とかが大変だっただけで……ああ、もう！　なんでこんなこと言っちゃうんだろう……」

パチン。自分の頬を両手で軽く叩く。気持ちを切り替える時の彼の癖だ。

「こんな恩着せがましいの、全然ママじゃない……もつと、ママらしくしたいのに……どうして、どうして……」

最初にこの仕草を見たのは、デートの行き先だか観る映画だかを決める時に、軽い言い合いになった時だろうか。

あの時は驚いたけれど、今はもう慣れてしまった。ただ、最近どんどん「こう」なる回数が増えていることは、ちょっと気になるかもしれない。

「しっかりしろ、日隅一輝……俺はママ、那美ちゃんのパパ、大丈夫、俺ならできる、できる……」

散々ぶつぶつ呟いて、頭をガシガシ掻きむしったあと、一輝くんはパッと顔を上げた。さすがは大手コンサルに勤めるエリートサラリーマン。自分で自分の機嫌を取るというアンガーマネジメントが徹底できている。

「よし。よし。わかった。じゃあ、もう一回数え直そう」

「えっ」

「大丈夫、大丈夫——俺、今度はちゃんと上手くやるから」

一輝くんがサイドボードを開いた。中には、紙おむつがぎっしり詰め込まれている。

赤ちゃんのものにしてはサイズが大きいかれど、介護用にしてはファンシーなデザインで、動物たちのマーチングバンドが、楽しそうに隊列を組んでいる。

（こういうことじゃないんだけどなあ……）

ぐっと言葉を飲み込んだ。正直に言ったら、一輝くんはもっとおかしくなってしまうかもしれないから。

「『どこに住んでるの?』その問いへの答えは、ただ夜空を指さすだけでいい。時代が、街が、私を見上げる。ここは、俗世から切り離された『神々のラウンジ』」

鳥肌が止まらなくなるような謳い文句が添えられたタワーマンションがある。

五十四階建ての、三十二階、一番奥の角部屋。私はここで、一輝くんを監禁されている。

出会った時から「こう」だったのではない。共通の友人の紹介で出会った一輝くんは、ちよつと神経質なところもあるけど、基本は優しいし一緒にいて楽しいよね、優秀な人って独特の雰囲気あるよね、という感じの、ごく普通の男性だった。

「こう」になったきっかけを作ったのは、私だ。

仕事で取り返しをつかないミスをやらかして、上司に激詰めされ、一輝くんが私を慰めるために持ってきてくれた「ちよつといい」（一輝くんの「ちよつと」は私にとっての「ハチャメチャ」であることは言うまでもない）ワインを飲み過ぎて、つい気が緩んでしまった、あの日。

「もう辞めたい」

「うん、そうだね。上手くいかないと、仕事辞めなくなっちゃうよね。うん、うん……俺はそれでもいいと思う。ねえ……」

「人生が辛い」

「そんな悲しいこと言わないでよ……あのさ、君さえよければなんだけど、俺と……」

「ママに甘えたい」

「マ……えっ？」

その後、「赤ちゃんに転職したい」「監禁ヤンデレっていいよね」「純愛レイプってオカズとして最高」「ママーッ！ オンギャッ♡ オンギャッ♡ バブーッ！」等々、酔った勢いで散々なクダを巻いた、らしい。このマンションへの引っ越し祝いを持つてのこのこやってきた私を犯しながら、一輝くんが証言していたことだ。

私の夢を一気にまとめて叶えんと、一輝くんは「クリトリスをお世話してくれる監禁ママ」になることを決めたらしい。

（エリートのこと、分かなすぎる！）

でも、完璧に私が悪い。全面的に私のせいだ。一輝くんがママになったのは、間違いく私が原因だ。でも、いつかは言わなきゃいけない。

赤ちゃんプレイって、そこまで真剣に取り組むものじゃないよって。

ただ、オギャオギャバブバブぐずる私を「かわいいねえ♡」と全肯定して優しく甘やかしてほしただけだから、育児日記を真剣につけたり、おむつを用意したりする必要はないんだよって——私は、いつ言えるだろうか。

「おおおお♡♡ やだっ♡ やだやだっ♡ もうイクのやだああっ♡♡♡」

フリフリエプロンに覆われた分厚い胸板を、力の入らない拳でぽかぽかと叩く。一輝くんは悲しそうに眉根を寄せ、「暴れちゃダメだよ」と私を諭した。

「どうしてやだやだするの? 『クリ責め』大好きなんだよね? 男の指でねちねち♡ こねこね♡もみもみ♡されて、デカクリ調教されるの『たまんねえ♡』って、那美ちゃんと言ったんだよね?」

「っお♡♡ 言っでないっ♡♡ そんなこと言わないっ♡♡♡♡」

「言いましたあ。あのさあ、悪いけど俺は那美ちゃんよりもずっと、ずーっと記憶力がいいんだよ？ ちゃんとママに従いなさい♡ ほら、赤ちゃんのお返事。なんて言うんだっけ？」

一瞬、ぞっとするような冷たい目になって、おむつの隙間から陰核をつまむ指先にぎゅっと力が込められる。

あ、やばい。慌てて首に手を回して甘えた声を出す。

「ママ♡♡ ママ♡♡ バブッ♡♡ バブーッ♡♡♡♡」

腰を無様にへこつかせながら媚びると、一輝くんの機嫌はあつという間に戻った。

「あゝ♡ 上手♡ お返事かわいい♡ そうだよ♡ もっとバブバブしてっ♡♡♡」

「あんっ♡ あっ♡ んっ♡ んっ♡ あん♡ ママっ♡ ママっ♡」

「あー……かわいい……♡ よわよわクリトリス、きもちーだねえ……♡」

「きもちっ♡ おひっ♡♡ あああっ♡♡♡ きもちーのしゅぎっ♡♡」

「うんうん♡ いーこ、いーこ……♡ ふふ、えっちなお豆が、どんどんぷくぷくなくなってきたる……♡ 素直で可愛い、俺のあかちゃん……♡ あは♡ よだれ出ちゃった♡」

首に巻いてもらったスタイで、口元の唾液を拭かれる。このスタイも一輝くんが用意したものだ。彼のエプロンによく似たピンク色、こぐまとお花のアップリケ。私の好みとは少し違うけれど、赤ちゃんには選ぶ権利はない。

「お口ゆるゆるになるくらい気持ちよかった？」

「ンおっ♡♡ はひっ♡♡ きもぢィでしゅっ♡♡♡」

「あー……かあわい……♡ すき……♡ いっぱいきもちーしましうねえ……♡♡」

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこ♡♡♡ ぬぢゅぬぢゅぬぢゅぬぢゅ♡♡♡

「ああ——~~~~♡♡ ママッ♡♡ ママッ♡♡ イクっ♡♡ イクぢやう♡♡ イクイクイク
イクッ♡♡♡」

絶頂から逃げるように浮き上がった腰は、一輝くんの大きな手のひらによってベッドに軟着陸させられた。

腹部を圧迫された勢いで、尿道からぴゅっ♡♡と生ぬるい液体が吹き出る。下半身を覆う紙おむつに、じわじわと潮が沁み込んでいく。

「あは♡ おしっこマーク、お空の色になっちゃったあ……♡」

鮮やかなブルーに染まったラインを、長い指がうっとりなぞる。もこもこ膨らんだおむつの上から、ちょうど割れ目がある位置を触っていることに、一輝くんは気づいているのだろうか。身をよじって抵抗すると、彼は首を傾げた。

「なんでやだやだするの？ ママ、変なことしたかな？」

「変っていうか……あの、そこ……その……」

口ごもっていると、一輝くんの表情はどんどん曇っていく。

「ねえ、どうしてちゃんと言えないの？ もうお名前忘れちゃった？」

「うあ……♡ ご、めんなさい……♡♡」

「自分の体のことだけ覚えてないのかな？ それとも恥ずかしくて言えない？ ふふ、なみちゃんのおばかさん。恥ずかしいところも、情けないところも、ママになら見せていいんだよ？」

達したばかりで過敏になったクリトリスを、たっぷり水分を含んだ吸水ポリマーが覆い隠す。ひたひたに濡れそぼった物体に、ぬりゆぬりゆ♡にちゅにちゅ♡包み込まれるのは、今の私には刺激が強すぎる。

「ん、アひっ♡ ひっ♡ ひいい……♡♡♡」

「おまんこ、だよ？ お・ま・ん・こ♡ おっきな声で言えるかな？ 『ぷにゅぷにゅおむつで、おまんこいじめるのやめてえ』♡ って……♡」

「あんがあつつ♡♡♡♡ おまんこつつ♡♡ おまんこやだあつつ♡♡」

ぬちぬちぬちぬち♡ ぬりゆぬりゆぬりゆぬりゆ♡

幅も長さも二センチに迫るほどに肥大化したクリトリスを押し潰す、ずっしり重くなったおむつ。

指で圧迫されることで、受け止めきれないほどの愛液がじっとりと滲み出し、割れ目から溢れ出る愛液と混ざりあう。

「おッ——~~~~っ♡ はあっ♡ ねえっ♡♡ もうイッた♡♡ イッたからっ♡♡ おむつでおまんこぐりぐりしゅんのやめてよおおっ♡♡♡」

「うん……♡ やんやんだねえ♡ おもらしおむつで、ぐにゅぐにゅ♡むにゅむにゅ♡ きもちよすぎて困っちゃうねえ♡ 頑張れ頑張れ♡ きもちーのに負けないで♡♡」

「あああああっ——~~~~っ♡♡♡♡♡」

はしたない声を上げて、体液を撒き散らかして、また達する。

「ねえ」

一輝くんは暗い声を出した。

しまった。いく時にはお作法があるんだった。

「クリッ♡♡♡♡♡は♡♡♡♡♡クリでゝきました♡♡♡」

慌てて報告すると、フーッと怒りを押し殺すような長いため息が続く。

「あのさあ……イクイクしたくなったら、『今イツても大丈夫か』を確認して、『どこでイク』かもちゃんと報告するって——ママ、教えたよね？」

「はひっ♡ あっ♡♡ ごめんにやさいっ♡♡ ゆるしてくだしゅいっ♡♡」

「まだ赤ちゃんだから仕方ないけどさあ……ママとしたお約束は守ろうか？ 俺、いつも『本当に無理』って言われたら、おまんこやめてあげてるよね？ ママ、お約束守ってるよね？」

おむつの隙間から指が入って来た。カリカリ♡ カリカリ♡ お仕置きがはじまる。

「那美ちゃんが約束を守ってくれないと、ママも約束を守りたくなっちゃうかもしれないよ？ いいの？」

「あ——~~~~っっ♡♡ ごめんなしゅいっ♡♡ ちゃんと言うっ♡♡ 言いましゅっ♡♡

ちゃんといぎゅいぎゅしゅりゅかりゃっ♡♡
カリカリやめで♡♡
カリカリゆるぢ
でっ♡♡ ママっ♡♡ ママあッ♡♡」

ぬぢゅぬぢゅぬぢゅぬぢゅ♡♡♡

割れ目をなぞり、浅い位置をかき回されて、今度はちゃんと「まんこイキしましゅ♡♡」と宣言できた。

潮が吹き出る。おむつが重くなる。つらい。きつい。恥ずかしい。でも、きもちいい。もう止まらない。私は、一輝くんの赤ちゃんだ。そして赤ちゃんの仕事は、ママにおまんこをお世話されること。これが私たちのルール。

「あは♡ まーたおもらし出ちゃったねえ……♡♡」

「ああ……ママ、おしっこごめんにゃさい……っ♡♡」

「だいじょーぶ……♡ おむつ穿いてたから、シーツはしみしみになってません♡ 自分から『穿きた〜い♡』っておねだりしたもんねえ♡ 賢いねえ……♡♡」

愛液も、潮も、もしかしたら尿も、とつくに自分の意思では止められなくなっていた。自分がイッているのかいないのか、どんどん境界線がぼやけていく。「怖い」と「きもちいい」の区別も、「やめて」と「もっと」の境目も、いずれなくなるのだろう。

「おむつ、こんもりしてきたねえ♡ これ以上しーしーしたら、しーしーで、ベッドびちよびちよになっちゃうかも……♡」

「ああ……♡ やだ……♡ ベッド濡れりゅのやだあ……♡♡」

私は必死に首を振った。

「ママあ……おむつかえてえ……♡」

これ以上汚れ物を増やしたくなかった。洗濯を——というか、全ての家事を担当しているのは一輝くんだけど、だからこそだ。

散々恥ずかしいところを見られておきながら、排泄物がついたシーツを洗わせるのは、まだかすかな抵抗がある。

「ああ……♡ ごめんね、今おむつ替えするから、えーんえーんしないでえ♡」

一輝くんは慈愛に満ちた聖母の微笑みを浮かべて、私の上から体をどかした。

「そうだよねえ♡ ママと一緒にねんねする、大事な大事なベッドだもんねえ……♡」

おしっこししみのお布団じゃ、おまんこムラムラしちゃって、『えーん♡えーん♡眠たいのに寝れないよ♡』って夜泣きしちゃうもんねえ……♡」

「う、うん……」

「いいよ♡ おむつ、替えましょーねえ♡♡」

おむつの両サイドがペリペリ破かれると、下半身の解放と同時に、むわあ♡と蒸れた甘酸っぱい匂いが広がった。一輝くんはクンクンと鼻を鳴らし、「那美ちゃんの匂いだね」と嬉しそうに目を細める。

恥ずかしいからやめたと抗議すると、一輝くんは楽しそうにくすぐす笑った。

「おまたとおしり、ピカピカにしてあげるから……ちょっとだけ、イクイクするの我慢してね？」

大きな手が、私の両足首をひとまとめに掴み、ぐっと上に持ち上げる。無防備に晒された粘膜は熱を帯びていて、おしりふきのひんやり冷たい感触が押し当てられた瞬間、思わず悲鳴を上げてしまう。

「ひゃうんっ♡♡♡」

「ああ、ごめんね……♡ 冷たいとびっくりするよね……♡ おしりふきウォーマー、やっぱりあった方がいいのかな……♡」

「購入を検討するよ」と、絶対に検討するつもりがない顔で言いながら、一輝くんはベトベトの陰部を丁寧に拭き上げていく。

「ねえ、拭いても拭いてもベトベトのまんまなの、なんでかなあ？」

「あ、あ……だって……ママがあ……」

「俺？ 俺のせいなの？ 那美ちゃんがイクイク我慢できないのって、俺のマネジメン
トが悪いせい？」

「あつ、ちがつ……」

「ふーん……他責思考は組織としても個人としても一番よくないと思うけどなあ。ねえ、
那美ちゃんがえっちなのって、那美ちゃんが恥ずかしい淫乱赤ちゃんだから、でしょ？」

包皮の中に戻りかけていた陰核を、丁寧に剥き直され、私はたまらず腰をくねらせた。

「あああ♡♡♡ん♡♡♡ママ♡♡♡ママ♡♡♡クリ♡♡♡やだ♡♡♡」

「どうしてダメなの？ ここ、一番清潔にしなきゃいけない場所でしょ？」

「あはあ♡♡マ、ママ♡♡さっきやった♡♡♡もうきれいになった♡♡♡」

くりくり♡ むきむき♡ きゅっきゅっきゅっ♡ 楽しそうにハミングする一輝くん
に、綿棒を使って恥垢をカリカリ♡羞恥プレイに耐えたことは記憶に新しい。彼だって
覚えているはずだ。ところが、一輝くんは不機嫌そうに首を振った。白目がどろっと濁っ
てきている。やばい。よくない。また、アレが始まる。

「そのあとお漏らししたから、また綺麗にしてあげるんだよ」

「でも、でも、クリやなの……！」

「クリカスが癒着して剥きづらくなるの、もっと嫌だよね？」

苛ついた様子で私の訴えを受け流しながら、彼はおしりふきを人差し指に巻き付けた。

「さっきもさあ、脚ピクピクさせて、オホ声出して、連続イキしてたじゃん」

「あ——そう、ただどお……っ！」

「俺、普通にお世話してるだけだよね？　綺麗なクリの方がいいよね？」

「う、ううっ……」

「我慢してね？」

熟れすぎて崩れる直前の苺みたいな色の陰核に、ゆっくり、ゆっくり、指が近づいていく。

（あ、来る。来る。また来ちゃう……）

——ぴとっ♡

「ひゃあああっ♡♡やだっ♡♡ぐっ♡♡ぐっ♡♡　またイっちゃううっ♡♡」

成人女性としての理性が、またしても快楽の波に飲み込まれていく。勝手に腰が浮き上がり、ガクガクと情けなく震えはじめた。

「あのさあ……！ クリ剥きしたくらいで、脚ピンアクメしないでよ！ なんで？ なんで我慢できないの？」

一輝くんが声を荒げる。スイッチが入ってしまったみたいだ。ぬちよぬちよ♡ ぐちよ♡♡ 陰核を苛む手は止まらない。

「むりむりっ♡ クリきついっ♡♡ 敏感すぎるからっ♡♡ ああああ♡♡ またイくっ♡♡ イくイくっ♡♡」

「イかないでって、ママ、ずっと言ってるでしょ！」

ぐいと剥き上げた陰核の根元が、愛液を吸った不織布でコスコス♡ゴシゴシ♡擦り上げられる。

「ねえ、なんで約束破るの？ ママが悲しむこと、わざとやってるの？」

「おっ♡ ひっ♡♡ ひあああ♡ やめてっ♡♡ クリさわんないでえっ♡♡」

「触んなきゃ拭けないだろっ！ 何!? 反抗期!? ママを困らせたくてわざとやってるの!? そうだとしたら大成功だけどね！」

「ちがっ♡♡♡ ちがうぐっ♡♡♡ あっ♡♡ はづづづっ♡♡♡ ぐぎゅ♡♡ ぐぎあすっ♡♡♡♡ ごめんなしやいいい——~~~~っ♡♡♡♡♡」

（あ、あああ♡♡♡ むり♡♡ むり♡ イクの我慢できない♡♡ ずっとイッてる♡♡ 頭のチカチカ止まなくなる♡♡♡）

息継ぎすらできない。苦しい。気持ちいい。脳みそがどこかに吹っ飛んでいきそう。どこだろう。このタワーマンションの中でないことは確かだ。

もうダメだと思った瞬間、ガクンと全身の力が抜ける。

「あ……」

気を失う寸前、最後に聞こえたのは、一輝くんの情けない声だった。

目を覚ますと、全身はすっかり清められていた。体を包むふかふかのパジャマは、やっぱりピンクでメルヘンな動物模様。でも、下半身を包んでいるのはおむつから普通のショーツに変わっているのが、感触でわかった。

（気絶しちゃってたのか……）

枕元のデジタル時計が示す数字は、深夜三時過ぎ。カーテンの向こうはまだ暗い。私は、すぐ隣ですやすやと眠っている一輝くんの顔をそっと覗き込んだ。

彼は美しい。本人は「可愛い」「アイドルの誰それに似てる」と言われるのを気にしているけれど、私は彼の顔が好きだ。

いつだって自信満々にきらきら輝いている瞳も、それを縁取る羨ましくらい長い睫毛も、すつきり通った鼻筋も、キスをするたびにその柔らかさに驚く唇も、心から好ましく思う。

その顔が、苦しそうに歪んでいる。夢の中でも何かを気に病んでいるのか、眉間にはくつきりと深い皺が刻まれていた。

（コンサルって激務だし……私の面倒まで見てるんだもん……そりゃあ疲れるよね）

このタワーマンションに閉じ込められてから、私は本当に何もしていない。会社には監禁開始の翌日、一輝くんに勝手に辞表を提出されてしまった。三食おやつと昼寝付き。押しも押されぬニート生活だ。

家事くらいは私がやるよ、と申し出たこともある。当然、笑顔で一蹴されてしまった。

「那美ちゃんは、赤ちゃんになりたいんだよね？」

「赤ちゃんは、ママにお世話されるのが仕事だよね？」

「赤ちゃんは、何もなくていいんだよ。いっぱいごはんを食べて、いっぱい眠って、いっぱい遊んで、いっぱいママに愛されていれば、それでいいの」

畳みかけられるように独自のロジックを展開され、それでも何かを提言しようとする
と気を失うほどの快樂を叩き込まれる。

詰んでいる。赤ちゃんプレイのセンスは怪しいけれど、クリトリス責めの才能は十二分にあるから質が悪い。それから、監禁の才能も。

「那美ちゃん、今日のお昼は銀だらの西京焼きだよ。飛龍頭と和風ローストポークも自作したんだあ。わっぱに入ってるから、美味しく食べてね？」

「思い付く限りのサブスクに入っておいたから、お留守番の間いい子にしてるんだよ」
「ベッドのシーツ替えたから、好きなだけお昼寝してゝ寝る子は育つて言うからさ」

ここに住み始めてから、私の生活水準は大幅に向上した。監禁と呼ぶには、あまりにも快適すぎる。

少々苛酷な赤ちゃんプレイに目を瞑れば、スパダリ彼氏とのスーパーハッピー同棲生活と言えるだろう。

「でもなあ……」

小さくぼやきながら、形のいい眉毛と眉毛の間の皮膚を優しく伸ばした。

彼はきつと今相当無理をして「ママ」をしている。

幾度も身体を重ねてきた私には分かる。一輝くんが好きなのは、お互いを慈しみ合うような穏やかなセックス。

今までしてきたのだって、「好きだよ」「私も」「挿れるね」「いいよ」みたいなお行儀のいい行為で、こんな一方的で破壊的な快樂責めではなかった。

（まあ、正直「面白くない」と思ったこともあるけど……）

（気持ちよさという面では今かなり充実しているけれど……）

思いつきだけでお腹の奥がじわつと熱くなる痴態の数々を振り払うべく、私は頭を振った。

ずっとこのままにいることは、できないだろう。私は赤ちゃんじゃないし、彼はママじゃない。

一輝くんは、努力の人だ。その賢さも、スキルも、人間関係も、美しいビジュアルだって、全部彼の頑張りの結晶。本人としては「特別なことはしてないけど、大体なんでも器用にこなせるんだよね」ということにしたいようだけど、私は彼が夜遅くまで資格試験の勉強をしていることも、定期的にジムに通っていることも、全部知っている。

そんな頑張り屋さんが、頑張りだけでヤンデレママをしている。世にも珍しい努力型のヤンデレ。その末路は、一輝くんがおかしくなるか、私が快樂墮ちするか、あるいは両方だろう。

（できることなら、一輝くんに正気を取り戻してもらって、元の平和な恋人同士に戻りたい）

彼の好きのところ——真面目で、努力家で、愛情深いところは、全く変わっていない

から。

その長所が空回りしすぎていることが、問題なのだから。

「そのためにも、早く赤ちゃんを卒業しなくちゃ……」

私の脱・赤ちゃん計画はこうだ。

とりあえず、今は一輝くんが満足するまで、ママと赤ちゃん生活を続けよう。そして、完璧主義者のママが納得するような「成長」を見せる。

目指すのは「一輝くんのおかげで人間としてこんなに成長できたよ！　ありがとう！　これからよろしくね！」というハッピーエンド。完璧な計画だ。

懸念点があるとするなら、一輝くんが納得できる落としどころは何かということだけれど――

この倒錯した関係が長続きしないことくらい、賢い彼が気づいていないはずがない。こちらがそれなりのゴールを提示したら、意外と乗ってきてくれる可能性もあったりして。

ありがたいことに、この状況でも、心身ともに大変に健康だ。ちょっと快樂には弱いけれど、回復は早く、引きずらないタイプ。

私ならできる。一輝くんのお世話を耐え抜ける。頑丈に生んでくれた両親に感謝です。

「……………なに……………」

唸り声と共に、背後からすっぽりと包み込まれる。

耳元に吹きかけられた強い酒気に、思わず顔を顰めた。お酒は苦手だから、付き合い程度しか飲まないって言っていたのに。私が気を失っている間に飲んだのだろうか。

むぎゅむぎゅと抱き締められる。ぬいぐるみのように、されるがままだ。「苦しいよ」と笑いながら抗議しようとした寸前、ぺろんと部屋着の裾が捲り上げられた。

「……えっ、いつき、くん……？」

乳房を、手のひらで温めるように揉みしだかれる。むにゅむにゅと柔らかい感触を楽しんでいるのか。一輝くんは私の胸が好き。本人は断固として認めないだろうけれど、絶対「おっぱい星人」だと思う。

彼女だから分かる。触るのはもちろん、顔を埋めたり、乳首を舐めたりするのも、絶対好き。でも、ここ最近あまり触られていなかったような気がする。服を着替えさせられる時に手がかすめていくことはあるけれど、こんな風にいやらしい手付きで触れられるのは久々だ。

もしかすると、「ママは赤ちゃんのおっぱいを触らない」という、彼なりの線引きがあるのかもしれない。

「あ♡ふ、あ……っ♡」

先端をくりゆくりゆ♡捏ね回されると、私の声はあっという間に甘くなってしまう。久しぶりの刺激に、むくむくと勃ち上がっていく突起は、まるで一輝くんの手を喜んでいるみたい。

「い、つきくん……おきてるの……?」

恐る恐る尋ねると、返事の代わりに、片方の手がそのままスルリと下へ向かって伸ば

された。くちゅ……♡♡ ショーツの脇から入り込んできた指が、割れ目にじわりと沈んでいく。

「あつ、だめ、だめ、だめ……♡」

「ん……ねかしつけだから……」

「ひにやつ♡ クリクリするの、やだぁ……♡」

「ふふ……うにやうにや、やーや、かわいいーね……♡」

うつとりと頬ずりしてくる彼の声は、ゾクゾクするくらい甘い。

寝ぼけているような、酔っているような、とにかくいつも通りではない様子——「ママ」になつては毎日が異常事態ではある——だけれど、摘まみ上げたクリをキュッ♡キュッ♡と引き伸ばす動作は、毎日のルーティンだから手慣れたもの。

「おっきく、おっきく、おっきくなーれ……♡」

「っ……ああっ♡♡ やだっ♡ ひっぱらないでよおっ♡♡ あっ♡ あ~~~~♡♡」

ジタバタ暴れても、一瞬で手足を押さえつけられる。ただでさえ、最近下着に擦れる
感覚があるのに——♡

（これ以上大きくなったら、普通に生活してるだけで、ずっとクリイキするようになって
ちゃう……♡）

「ん……あばれるのだめ……おとなしくしててよお……」

「おひっ♡♡ んっいいッッ♡ ああ——♡♡♡♡」

「はい、だめえ……♡」

あっという間に達してしまった。指の動きは止まらない。シコシコ♡扱かれ、くにゅくにゅ♡揉みしだかれ、すぐに次の絶頂が近づいてくる。

「やだっ♡ ああっ♡ もうイったからあっ♡♡ やだっ♡ だめだめっ♡♡ もうお
おきくなんないっ♡♡ クリつよくしにゃいれえつつっ♡♡♡」

「だーめ……まだたりない……おれ、『クリちんぽ』にするんだからあ……」

「ちんっ……!!」

がつんと殴られたような衝撃が走る。

一輝くんの、というか、普通に生きている男性の語彙には絶対存在しない淫語。真面目で、こうなる前は上品で、光の当たる道を歩いてきた彼が、どうして。一輝くんは幸せそうに言葉を続けた。

「毎日発情しっぱなしのエロクリにしようねえ、ふたなりちんぽに間違われるくらいのでカクリに育てようねえ、だいじょうぶ……ガントチャートはできてるから……」

「ちょ……何言ってるの！ 一輝くん!？」

とんでもない計画を告白された気がする。くらくらししていると、ころんとベッドにうつ伏せに寝かされた。

上に一輝くんがのしかかってきて、あつという間に身動きが取れなくなる。耳元に吹きかけられる熱い吐息。太ももに当たっているそれも、硬く、熱い。

（一輝くん、ちゃんと私で勃起するんだ……）

ひゅっと思を呑む。あるんだ、性欲。まだあつたんだ、性欲。

久しく胸を触られていないことや、ここ最近体を重ねていないこともあって、一輝くんはもう私のことを女じゃなくて「赤ちゃん」としか見ていないのかもと不安だった。

（一輝くん、我慢してたのかな）

ぐりぐりと押し付けられた性器は、どんどん硬度を増していく。なんだか申し訳なくなってきた。

仮に我慢させていたとしても、悪いのは強烈なクリトリスお世話で彼女を毎晩気絶させている彼自身だけれど、それでも胸がちよつとだけ痛む。いや、結局彼がクリトリスお世話をしている理由は私なのだから、きっと私たちは共犯だ。

「あぐっ……♡んふうっ……♡♡♡」

ずぶ、ずぶ、ずぶ……♡ ゆっくり、ゆっくり、一輝くんの熱がナカに収まっていく。
散々弄られとろとろに解され切ったソコは、真夜中の侵入者を歓迎するように、亀頭に
甘く吸い付いた。

「っふ……おなか、あっためるとよく眠れるから……ぬくぬくにしようね……」

（ああ……♡ おちんちん、あったかい……♡ ちょっとずつ奥に入ってくの、血管の
形すっごいわかる……♡♡）

一輝くんは、顔だけじゃなくてペニスも美しい。美術書に載せたくなくなるくらい、長さ
も反り方もパーフェクト。女の子の弱い所を、彼は的確に責め立てることができる。

「ふ、あ♡んっ♡んっ♡いつ、き、くん……っ♡ ああっ♡♡」

とちゅんっ♡ 最奥の窪みに一輝くんが辿り着く。激しいピストンや、ポルチオをぐりぐりすり潰すような圧迫はされない。

私を抱きしめたまま、息を吸って、吐いて。お腹の膨らみやへこみに合わせて、おちんちんもゆるゆる動く。

赤ちゃんのほっぺにちゅ♡ちゅ♡とキスするみたいな、優しい刺激。それだけで全身に震えるような多幸福感が広がっていく。

「いつきくん、いつきくん……♡」

「うん……♡ 俺、ちゃんというからねえ……♡ つながったまま、とろとろねんねし
ようねえ……♡」

覆いかぶさるように手が重なってきて、ゆるく指を絡める。恋人繋ぎとはちよつと違

うけれど、ママと赤ちゃんではしない繋ぎ方だ。

（一輝くんは今、どっちなんだろう……寝バックであやしてくれるママ？ それとも、えっちな寝かしつけをしてくれる彼氏？）

考えているうちに、どんどん瞼が重くなっていく。ゆっくりゆっくり、まどろみに落ちていく途中、膣内に何かが注がれたことに気づいたけれど――

（まあ、明日の私が何とかすればいい、よね？）